

ポートランドの取り組みから「原点」を見て

2013年東京財団週末学校研修生 新潟県村上市 富樫 充

ポートランドの現地研修を終え、今、率直に感じていえることは、「原点」である。

最初、現地に赴く前、市民意識が高く、市民と行政との関係も良好で、常に、最先端の取り組みを進めている「市」いうイメージを抱きつつ伺った。

実際、市民との関係は、その通りでもあるが、基本は同じ、抱える課題も同じであった。しかし、取り組む姿勢や向き合い方が全く違っていた。行政も、市民もである。

行政は、愚直に市民と向き合い、きめ細かな取り組みを進めている。多様な意見を踏まえ、様々な可能性を活かし、具体的な取り組みに反映する。その仕掛けがきちっとできているように感じられた。しかし、そこには、住民が理解してくれないことや、総論賛成各論反対などの言葉も存在する。日本と同じ模様がある。

対し市民は、自らの意思をしっかり持ち、地域や自らのことをちゃんと考えていると感じた。日本では、えてして、行政がすべて計画をつくり、のちに市民の意見を聞いたという形で作り上げるということが一般的である。ポートランドでは、当事者意識がきちんとあり、そこに、ちゃんと意見を言い、具体的に参画できているように感じられた。

その市民と行政との関係性が、長年培われてきており、意識付けが自然とできているように思えた。

オークグローブで、チップス ジャンガー氏から「私たち、アーバングリーンのメンバーは、ローカルを知り、住みやすく、いいものにするために行動を行う組織。ネイバーフットもないこの地で、私たちが中心となり、この地域のために一人ひとりに声掛けをし、話を聞きマックス駅開発の計画づくりを進めた」といった話をいただいた。その後、伺った広域行政政府の「メトロ」では、「市民との信頼関係を大切にし、取り組みを進めている」とお話をいただいた。

要は、何のためにといったところの基本は、行政としては市民のためであり、地域としては自分たちのために取り組んでいる姿勢がうかがえ、冒頭に記した原点と感じたところであった。

日本でも、地域主権、市民協働、市民参画といった単語が並べられ、あたかも、住民主体の取り組みが率先して進められているように見え、私の市でもそうであるが、まだまだ、行政の都合で進められていると、改めて実感した。



過去、私の地域でも道普請や飲料水用の水道管敷設など、住民の手で進められ生活を改善してきた歴史がある。しかし、今日、生活の平等の名のもとに、行政が住民の手から取り上げ、取り組んでいる現状がある。

極端なことはできなにしる、住民の生活に身近なところで、住民の手に戻す取り組みを今回の研修を通じて取り組んでみたいと感じたところである。

最後に、本研修に際し、日々ご指導いただき、ビアストーミングでは、熱く語っていただきましたダン ヴィッチーニ 様、チップス ジャンガー様大変ありがとうございました。

そして、事前研修から具体的なご指導をいただいた PSU の西芝先生をはじめ、スタッフの皆様、本当にありがとうございました。この場をお借りし、お礼を申し上げます。

今回の研修が、これまでの週末学校の研修を結び付けていただく、具体的なものであり、自らの地域に落とし込める充実した研修であったと感じ、報告のレポートとします。